

特別展示

笹埜能史展 ナマケモノガタリーSLOTHEATERー

開催のお知らせ

2024年12月12日（木）～24日（火）／宝塚市立文化芸術センター（兵庫県宝塚市武庫川町7-64）

宝塚市立文化芸術センター（所在地：兵庫県宝塚市／館長：加藤義夫）は、宝塚市を拠点に活動する美術家・笹埜能史（ささの よしふみ）が創作の軌跡を辿り語る展覧会、特別展示＜**笹埜能史展 ナマケモノガタリーSLOTHEATERー**＞を、**2024年12月12日（木）から24日（火）**の会期で開催いたします。



《象の鼻》2021年（※作品イメージ）

ゆったりとした動きから「怠け者／sloth」と呼ばれるナマケモノ。生涯のほとんどを樹にぶら下がって過ごし、ゆったりとマイペースに、自然の循環の中で生きています。

今回の会場となるキューブホールと対峙した際、笹埜の脳裏に浮かんだのはナマケモノの姿でした。**天井高約6メートル、自然光が降り注ぐ開放的な空間に天井からぶら下がるナマケモノ**。笹埜がその姿を想起した理由のひとつには、自身が持つ**ナマケモノにまつわる記憶**がありました。

幼い頃、劇でナマケモノを演じた（演じさせられた）記憶――。それは長年ひっそりと作家の中に残り続け、コロナ禍という世間／世界と隔絶された時間を経て、再び笹埜の意識下に浮かび上がったのです。

「**ナマケモノと語る**」をコンセプトとした本展で表現するのは、**笹埜の持つナラティブ（物語）**です。幼い日の思い出、少年の頃の風景、作家としての迷いや挑戦、世界について、老いについて、そして死の欲動についての思索。笹埜のこれまでとこれからの道行きを「**七つの物語**」を通して展開します。

「**SLOTHEATER（=sloth／ナマケモノ+theater／劇場）**」にぜひお越しください。

開催概要

【**展覧会名**】 特別展示＜**笹埜能史展 ナマケモノガタリーSLOTHEATERー**＞【**出品作家**】 笹埜能史（ささの よしふみ、美術家）【**会期**】 2024年12月12日（木）～24日（火）【**休館日**】 毎週水曜日【**開館時間**】 10：00～18：00【**観覧料**】 無料【**会場**】 宝塚市立文化芸術センター 1階キューブホール（〒665-0844 兵庫県宝塚市武庫川町7-64）【**主催**】 宝塚市立文化芸術センター（指定管理者：宝塚みらい創造ファクトリー）【**後援**】 神戸新聞社

関連イベント

○ギャラリートーク「ゆるりとナマケモノ語り」

出品アーティストの笹埜能史が、ゲストや参加者と展示作品を囲んで語り合うトークイベントです。

【日 時】2024年12月14日（土）14時～15時

【場 所】展覧会会場内（宝塚市立文化芸術センター 1階キューブホール）

【その他】予約不要、開催中は自由に会場に入ることができます。

○ダンスパフォーマンス「DANCE on SLOTHEATER」

ダンサー・美術家として横断的に活動する升田学（ますだ まなぶ、宝塚市在住）による身体×作品＝呼応する身体をテーマとしたパフォーマンスを行います。

【日 時】2024年12月22日（日）①15時～②16時～（所要時間は各回約20分）

【場 所】展覧会会場内（宝塚市立文化芸術センター 1階キューブホール）

【その他】予約不要、パフォーマンス中は自由に会場に入ることができます。

出品アーティスト

笹埜 能史（ささの よしふみ）

1954年 兵庫県生まれ。

1978年 大阪教育大学美術科（現・大阪教育大学教育学部教育協働学科）卒業。

1981～2015年 宝塚市にて図工専科教員として勤務。

阪神・淡路大震災を契機に現代美術の方法で世界の掴み方や繋がり方を探しはじめ、現在に至る。

○主な個展

1996年 AIR GROOVE（Gusto House）

1997年 FLOWER WALKER（gallery Kuruse）

1999年 Self Ping Pong（City gallery）

2001年 Quatain（gallery Den）

2002年 Dispersion（City gallery）

2003年 AIR WALKER（gallery H.O.T）

2004年 かまぼこ旅館（space KAMABOKO）

Pillow War（gallery Den）

2005年 DENKEN（gallery H.O.T）

2007年 Vaulting Horse（gallery H.O.T）

2008年 Vaulting Horse2（art gallery ZONE）

2009年 通勤環（gallery H.O.T）

2011年 REFLECTION（gallery H.O.T）

2013年 あすもおかしいか（gallery H.O.T）

2015年 DEPOT（gallery H.O.T）

Reflection2（gallery 手風琴）

2017年 DIFERENCE（gallery H.O.T）

談談笑（海月文庫）

2018年 処分とUFO（gallery H.O.T）

MIMIC & UFO（創治朗 art gallery）

2019年 BASE（art space KAORU）

DENKEN（city gallery 2320）

good-by Danch（Triangle gallery）

2020年 象の鼻（gallery H.O.T）

2021年 境界と手袋（宝塚市立文化芸術センター）

○主なグループ展

2001年 ART SHOP SHOW（宝塚SunViora）

2004年 MOVEMENT（空気美術館）

映像3人展（space SOU）

2005年 Gallerism（現代美術センター）

2006年 地力（神戸磯上門屋ビル）

ギャラリー新習慣（gallery H.O.T other）

2008年 P & E（Art Court Gallery）

art and craft marche

（伊丹三軒寺広場、2010年参加）

2009年 瀧道まるごと美術館（箕面橋本亭）

2013年 Gallerism（京阪シティモール）

2014年 宝塚 Art Ten Ten

（宝塚文化創造館、2015～2017年参加）

2015年 箕面の社 Art Walk（箕面橋本亭）

2016年 車美術フェス（伊丹三軒寺広場）

パクリ展（art gallery ZONE）

2017年 KURUKURU展（Cross Road Cafe他）

テーマ展（海月文庫、以降多数）

2018年 凹凸版展（東京都美術館）

2020年 We Age（京都芸術センター）

2021年 ギャラリズム（Pias gallery）

ギャー旅（宝塚市立文化芸術センター）

2022年 ROBAOとSASAMARU（宝塚市立文化芸術センター）

No sider（宝塚市立文化芸術センター）

展会議（海月文庫アートスペース）

2023年 シン・コミック展（Triangle gallery）

下町芸術祭（新長田JSR）

会場となるキューブホールは天井まで6 m以上の高さがある。

以前からここに立つと、バーからぶら下がる大きなナマケモノのイメージが浮かび、いつかそれを制作、展示したいと思っていた。樹上の哲学者、また気ままな環境主義者であるナマケモノへの憧れだけでなく、因縁を感じる生き物としてテーマにしたかったからである。

60年前、小学4年生の私は学芸会の舞台に立っていた。

演じた役こそがナマケモノだった。

幕が上がる前と終了間近だけひとりぼつんと出演、第二幕の動物たちが集まる賑やかな場面に私はいない。森の広場でのお祭り、やがて仲違いから修羅場になり、散らかった広場だけが残された。再登場した私はがらんとした舞台に落ちている果物を両手で掴み、見得を切りながら台詞を一言「残り物には福があるー」・・・幕。

不可解な物語だった。

以来、意識下に住みついたナマケモノは、時に急ぐ私に問いを発し、生き方のヒントをくれた。そしてコロナ禍、閉じた日常のもと活性化した。

SLOTHEATER (sloth/ナマケモノ+theater/劇場) と名付けた今回の展示作品は、私由来の7つの物語に添って構成を試みている。

言葉とモノまた連想と感受が戯れる、散らかった広場のような空間でのナマケモノガタリ。お訪ねくださればちょっとした「福」が現れるかもしれません。

(笹埜 能史/ささの よしふみ)

展示構成/作品紹介

1. SLOTHEATER

——記憶に住む、ナマケモノと語りたい

きっかけは、キューブホールの天井を見てぶら下がる大きなナマケモノをイメージしたことだった。それは子どものころ演じた(演じさせられた)まま不可解に記憶に住むナマケモノの仕業かもしれない。学芸会で演じて以降、記憶に住まう友・ナマケモノ。ナマケモノを通じて、自らのナラティブ(物語)について美術の方法で表現しようと思った。

第一の物語は「sloth/ナマケモノ+theater/劇場」がテーマ。意識下に住まうナマケモノを手掛かりに過去を追想し笹埜という人間の物語の始まりと、その根源にあるモチーフを表現します。



《通勤環》2009年(※作品イメージ)

2. SLOTHTHANKS

——団地と家族、一人称の風景を思い出す

何度か記憶をテーマに制作をしたことがある。
思い出という強い当事者性に立つことを、美術と呼べるかどうか分からないが
団地住まいだった少年期の一人称の風景を思い出せるのはありがたいこと。
団地の螺旋階段にぶら下がる子どもとナマケモノ。
センス・オブ・ワンダーに感謝。

第二の物語では「sloth／ナマケモノ＋thanks／感謝」を軸に
幼少期の笹埜の記憶をたどり、紐解いていきます。
団地での幼い日々の記憶。
その記憶の主体は「過去の自分」。
ここでは「今の笹埜」を通して紐解かれる記憶が作品となり
作品を通じて空間に立ち現れます。



《象の鼻》2021年（※作品イメージ）

3. SLOTHEMES

——自由帳に何を描く、今答えるなら「何でもいい」

何を描くかは60年くらい悩んできたこと。
今答えるなら「何でもいい」だ。
何でもありの50年を集めた自由帳的絵画。
神戸湊山水族館のナマケモノのニックネームは「フリーダムボーイ」。

三つ目の物語は「sloth／ナマケモノ＋theme(s)／主題」。
主題・画材・支持体・様式等における笹埜の豊かさや
様々な方向に向けられた興味・視線を、多様な作品群によって紹介します。
「作家」という自負と共に歩みを進めて50年。
挑戦を続ける豊かな制作態度をご覧ください。

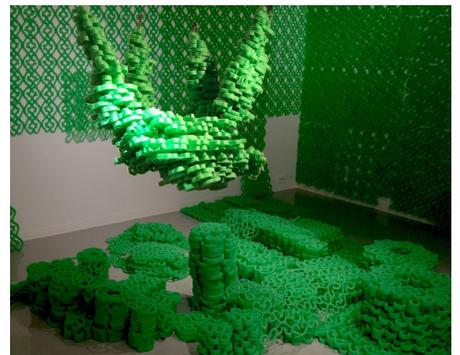
4. SLOTHERAPY

——連想と癒し

言葉や形が内容呼び寄せる。
偶然目にしたUFOという名の養生材から始まる意味の連続が面白い。
ここでは緩衝材的対話セラピーの場をつくる。
生態系の境界に住うようなスローアイドルのナマケモノは
優れたセラピストである。

第四の物語は「sloth／ナマケモノ＋therapy／癒し」がテーマ。
笹埜がある日偶然目にした、洲浜型の養生材。
この養生材は、壁などの角に設置して壁そのものを守り
同時に壁と対峙する“相手”も守る「緩衝材」でした。

「あなたとわたし」の境界として在りながら、
境界を守り、繋ぐ緩衝材。
笹埜が見出した「癒し」を作品から体感する物語です。



《処分とUFO》2018年（※作品イメージ）

5. SLOTHINKING

——遮断して考えて交信して、孤独を怠ける

時に世界を遮断して考えることは大切だと思う。
時折外部と交信できればそれもいい。
孤独を一旦休む場所。
ベッドの上で孤独を怠けること。

五つ目の物語は「sloth／ナマケモノ＋thinking／思索」。
「孤独」は思索を深めるための時間を与えてくれるもの。
それでも時には孤独から、思索から、逃げてもいい。
笹埜が見つけたのは「孤独を怠ける」場所の大切さ。

過去、笹埜作品では跳び箱をクレーンで吊り下げました。
今回はその「ナマケモノ的跳び箱」の変奏として
「孤独を休むための跳び箱」を主軸とした作品を展観します。



《Vouting Cajon》2020年（※作品イメージ）

6. SLOTHUNDER

——視界の皺、網膜の稲妻と古い

このところ、風景と網膜の間に浮遊する稲妻のようなものが気になる。
ナマケモノには「諦念」のようなものがある。
たとえば猛禽類に襲われた瞬間、抵抗や痛みを先行してショック死を選ぶとか。
身体の老いは結構な負荷を強いるが、ここはナマケモノの諦念に倣おう。

第六の物語に登場するのは「sloth／ナマケモノ＋thunder／雷」。
年齢を重ねることで明確になる、身体が、細胞が、老いるということ。
飛蚊症のように、いつの日からか視界に浮かぶゴミやホコリのようなもの。
それは稲妻の形をして、稲妻のような衝撃で、笹埜の眼前に「身体としての古い」を突きつけました。

「身体としての古い」が逃れようのない宿命であれば、抵抗するのではなく、受け入れる。
キューブホールのガラス窓に表現された笹埜の視界を通じ、
ナマケモノの「諦念」に倣った心境と、作家としての「負け惜しみ」精神をご覧ください。

7. SLOTHANATOS

——タナトス（死の欲動）を思う

地上型の大ナマケモノ、メガテリウムは最大級の哺乳類として一万年くらい前まで生息していた。
絶滅した理由には、ヒトの乱獲もあったという。
現在「絶滅」は、地球に、人に、遠い言葉ではなくなった。
ナマケモノの見る世界を想像したり、タナトスを想うことで、
生の情動は未だ照らせるかもしれないとアートの営みに思いながら……。

最後の物語は「sloth／ナマケモノ＋thanatos／死の欲動」がテーマ。
精神学者のフロイトは、人間には「生という快楽」を追い求める行動ではなく
戦争・殺戮兵器の開発・自然破壊といった「死という不快」に向かう衝動があるとし、
それを「タナトス（死の欲動）」と名付けました。
本能ではなく、やめたくてもやめられない、自分をどうしようもなく駆り立てる「衝動」。
その「タナトス」との闘いの過程こそが「生」なのです。

万物にいつかは訪れる「死」という終わりの形。
「死」を想えばこそ照らし出される、笹埜の作家としての「生」、そして「これから」について、
ナマケモノの生き様を通して作品に表現します。



宝塚市立文化芸術センター

- 【所在地】 〒665-0844 兵庫県宝塚市武庫川町7-64
- 【電話】 0797-62-6800（開館日の10：00～18：00）
- 【休館日】 毎週水曜日（祝日は開館）
※年末年始（12月29日～1月3日）は休館いたします。
※その他設備点検などにより、臨時休館する場合があります。
- 【開館時間】 センター・屋上庭園／10：00～18：00 メインガーデン／10：00～17：00
- 【入館料】 ・宝塚市立文化芸術センターへの入館は基本無料です。
・展覧会や催しによっては、一部会場が有料となります。



報道関係者お問い合わせ先

- 宝塚市立文化芸術センター 担当（山口・大野）
- 【電話】 0797-62-6800（開館日の10：00～18：00）
- 【メール】 event@takarazuka-arts-center.jp